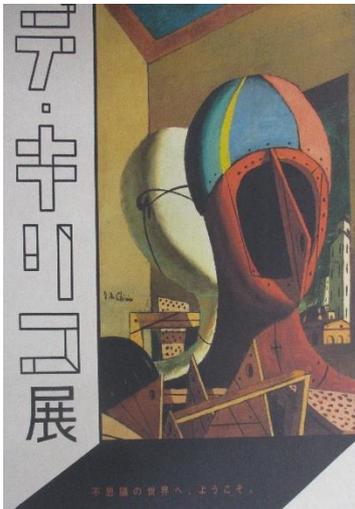


デ・キリコ展 不思議な世界へ、ようこそ

東京都美術館 24. 04. 27～08. 29 神戸市立博物館 24. 09. 14～12. 08

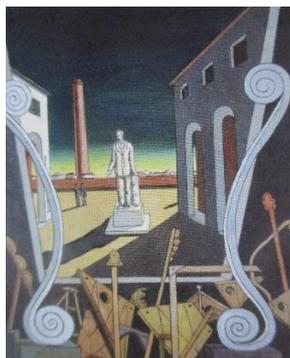


「ジョルジョ・デ・キリコ」(1888～1978)は、1910年頃から簡潔明瞭な構成で広場や室内を描きながらも、歪んだ遠近法、脈絡のないモチーフの配置や幻想的な雰囲気によって、日常の奥に潜む非日常を表した絵画を描いていた。

これを「形而上絵画」と名付けた1910年代の作品は、「サルバドール・ダリ」や「ルネ・マグリット」といったシュルレアリスム(超現実主義)の画家をはじめ数多くの芸術家たちに衝撃を与えた。彼は、1919年以降は伝統的な絵画技法に興味を抱くようになったが、形而上絵画の題材の作品も制作をしていた。

本展は本邦では10年振りの個展で、「キリコ」の70年にもわたる画業を「イタリア広場」「形而上的室内」「マヌカン(マネキン)」のテーマに分け、初期から晩年までの作品「約80点」を紹介し画伯が描いた世界を辿る。この「マヌカン」は個展絵画の重要なモチーフである人物像に代わり登場したものである。

最初のセクションでは、「画伯の肖像画」を紹介しているが、とりわけ様々な衣装をまとい、自己演出された自画像に注目したい。



デ・キリコ 《南国の歌》 1927年頃 油彩/画布 25 x 60cm 左図
作品は、表情もなく性もないマネキンが、2体揃ってギターを奏でている。

そのモチーフは、太陽がさんさんと降りそそぐ、南国ギリシャで育まれた情景であろう。画伯の絵画の特徴は、同じような構図で連作を描くことにあり、色彩や鼻や眼のないマネキンの顔が、不思議に優しく明るい幻想に満ちている。

デ・キリコ 《イタリア広場(詩人の記念碑)》 1969年 油彩/カンヴァス 中図
デ・キリコ 《赤い塔のあるイタリア広場》 1934年 油彩/カンヴァス 右図